

2014 年 8 月　生徒会宮古高校訪問

ともしび
共生委員会ニュース

2015 年度　2 号

2015 年 6 月 5 日版

共生・校外学習委員会は平和や共生に関わる活動、修学旅行などを担当する教員の委員会です。原爆投下の地、長崎を訪れる 2 年生の修学旅行だけでなく、高等部の 3 年間の生活を通じ、同じ社会に共に暮らす様々な人々との関わりに目を向け、平和や共生の問題を考えていきましょう。この共生委員会ニュースでは、様々な経験をする機会を得た生徒や教員の声も他の多くの皆さんへ届けたいと思っています。その経験を共有し、一緒に考えるきっかけとして下さい。

Summer Plans

Sam Berry(英語科)

What are your plans for the summer? A few years ago, I made a promise to myself. I said, “Every year I will spend one week doing volunteer work”. So, that year in the summer, I went to Hokkaido and I volunteered on an organic farm. The next year, I went to Nagasaki and worked on a different farm for two weeks. It was a hard, but **rewarding experience**, and I learned many things. The next year was 2011, so in the summer holiday, I went to Ishinomaki in Miyagi and helped to clear up **debris** after the earthquake. Again, it was very hard work, but I met so many amazing people from all over the world, and for me it was an **extremely positive** experience. The next year, I went to Uganda to visit an **orphanage** there. Although I saw many things that shocked and saddened me there, again I met so many incredible people and children, and it was another experience that I will never forget. Recently, I haven’t really been **keeping my promise**. I have been saying things like “I am too busy”, or “I need to relax”, but actually these experiences were some of the most **memorable** experiences of my life, and I think really helped me to become a better person. So, this year, again I’m thinking about what I can do. It’s a wonderful thing to be able to help somebody, and improve yourself at the same time. I’ve heard about students in this school visiting the Philippines, visiting Tohoku, and other places in their school holidays to learn, help and volunteer, sometimes on school programs and sometimes with other organizations. How about you? What can you do this summer?







Vocabulary

a rewarding experience - 実り多き体験

debris - がれき

extremely positive - とても良い

orphanage - 孤児院

keep a promise - 約束を守る

memorable - 忘れられない

震災支援と宮古高校との交流の歩み

中久木（国語科）

2011 年の 5 月、私は東北の地を訪れ、いまだ全く手がついていないがれきの山が積み重なった海岸の町に佇み、言葉を失っていました。船は山に登り、家はきれいにこそげ取ったかのようになくなっている……。それはまさしく悪夢としか言いようのない景色でした。

今すぐにでも、災害に遭われた方に何かしたい。そのためには何をしたらいいだろうか？

部長先生や相良先生、一緒に行って下さったＯＢの方々などと知恵を絞って考えましたが、未曽有の規模といえる災害ともなると国家の統制などがあり、民間ボランティアなどにも制約があってなかなかうまくはいきませんでした。そこに西川部長先生の教会のお知り合いで、偶然宮古教会の教会員である方が、県立宮古高校とのご縁を取り持って下さったのです。そして翌年年の夏には、画像のようにラグビー部が交歓試合に行かせて頂けるまでに話は急速に進展しました。ラグビー部の顧問としても、宮古高校と試合ができた感動……それは今でも忘れられません。その翌年は野球部が出かけて試合をしました。そしてようやく、生徒会同士の交流も活発に行われるようになったのです。

その後の宮古高校や宮古市との交流の展開は皆さんも知る通りですが、私がとても強く感じたのは、被災者側であったにもかかわらず、宮古に限らない東北の方々の「暖かさ」でした。ご家族を失くされたり、津波で家を奪われたりと、そのご苦労は並々ではないものがあったはずですが、ボランティアにやってきた私たちの方が返ってお気遣いいただき、もてなされ、しみじみとその人情の豊かさや思い遣り深さに感動しました。同時に、どんなことがあってもこの方々を支え続けなければならないとも強く思いました。

現在、表面的には平穏を取り戻したように見える宮古をはじめとする被災地ですが、実際には画像にある田老地区のようにいまだに復興のめどすら立っていない海沿いの地域もあります。4 年たっても原状回復ひとつも容易なことではないのです。

聖書のみ言葉にもありますが、私たちは「善き隣人」で有り続けることを常に求められ続けています。これからも、生徒の皆さんと共に宮古をはじめとする被災地の方々としっかり関わっていこうではありませんか！





2015 年度　岩手県宮古訪問プログラム　参加者募集

日程：　８月４日（火）～8 月６日（木）　２泊３日

訪問地：　岩手県宮古市

内容：　宮古市田老地区防災研修、宮古高校、宮古北高校との交流など

申し込み・問い合わせ：　武藤（理科　物理・地学）まで

締切：6 月 16 日(火)

この楽しさをわかってほしい

ボランティア部へのインタビュー

ボランティア部の部長 HR307 I.M. さん、副部長 HR304 N.K. さんにボランティア部についてインタビューしました。



Q：部員の人数は？

「50～60 人くらいです。」

Q：どんな活動をしていますか？

「①毎月第 4 日曜日のえびす青年教室への参加。教室に参加する障害のある方、色々な年齢のボランティアさんとも一緒に班に分かれて、調理、スポーツ、アートなど様々な活動を行います。

②年 2 回、横浜寿地区でホームレスの方への炊き出しのお手伝い。高等部からは毎回数人の参加ですが、ボランティアには大人の方や他の学校からも参加しています。ホームレスのことを知るビデオを見て学ぶこともあります。

③文化祭ではバングラデシュの小物を売って寺子屋を立てるのに役立つ活動をやっています。

④夏に中高 YWCA によるカンファレンス合宿に参加し、日本全国の高校生と交流を持ちました。つながりを大切にし、学んで、考えて、発信していくことを意識して行っています。」

Q：先日はネパール地震に対する募金も行っていましたね？

「震災の際は、高等部で募金を行うのは当然のことようになっており、ボランティア部（と生徒会三者）が担当します。今回、思った以上に、みんながネパールの震災に注目していて、結構募金を入れてくれました。」

・・・高等部で集まったネパール地震への募金金額は **69,593 円**でした**！！**

Q：二人はどうしてボランティア部に入ったのですか？

「人のために何かやってありがとうと言ってもらえることがうれしく、世界で自分が出来ることを困っている人にしている人をすごいと思う。そういう機会が作れるように入りました。

「友達から誘われて入ったら、自分くらいしか入っていなかったのですが、一度青年教室の活動に出てみたら、想像と違った初めての体験ができて、続けました。やりがいがあり、楽しめています。経験のある大人の方とミーティングをして、対応の仕方を考えるなど、様々なことを吸収することもできました。」

Q：部の活動についてどう思いますか？

「こんなに楽しい経験をしているのに、参加しないのはもったいない。この楽しさをわかってほしい。」

「最初の 1 回目の参加が大事。その後、続けて行きたくなるので、まず参加してほしい。」

Q：ボランティア部でない人へも一言ありますか？

「ボランティア部でない人も、あしなが募金など自分でできる活動があるのでぜひやってほしい。」

Iさん、Nさん、ありがとうございました。二人が楽しそうに活動の経験を語るのを聞くことができ、我々教員もうれしい気持ちにさせられました。　　（理科武藤、英語科キャロル）

アレクサンダー・アレイニコフ国連難民副高等弁務官来日記念講演会

2015 年 5 月 14 日(木) 青山学院ガウチャーメモリアルホールにてアレクサンダー･アレイニコフ国連難民副高等弁務官来日記念講演を開催し、高等部から 51 名の生徒が参加しました。「The global refugee situation; challenges faced by UNHCR and the International Community 世界の難民問題:UNHCR と国際社会が直面する課題」と題して行われたこの講演会では、様々な具体的事例とともに難民問題が直面する今日的な課題についてご講演頂きました。難民問題の現状はどうなっているのか、日本に期待される真に国際協調的な姿勢とはどのようなものか、などの世界情勢と絡んだ複雑な課題について、高等部生は真剣に聞き入り、考える機会を与えられました。

3 年生　N さん

みなさんは「難民」についてどのくらいのことを知っているでしょうか。多くの日本人は何となくその意味を知っている、だとかテレビで難民に関するニュースを見たことがある、だとかそのくらいの情報しか持っていないのではないかと思います。実際に、私もこのお話を聞くまでは“戦争や災害で今まで住んでいた場所に住めなくなった人のことだろうな”という程度の知識しかありませんでした。しかし、アレイニコフ氏がしてくださったお話しは「難民」というものがいかに大きな問題で、また私たち一人ひとりがどのようにしていくべきかを教えて下さるものでした。

まず、最初に衝撃を受けたのは難民は一時的なものではない、ということです。

難民には戦争が終わり、その後住んでいた場所に戻ることができる人もいる一方で、長年その場所に留まるしか手段がない人も大勢います。最近ではひとえに難民といっても国境を越えて他国に助けを求めるものと、国境を越えずに国内で避難生活を送るものの２パターンがあり、後者は「国内避難民」と呼ばれています。世界にはこのような国内避難民として難民キャンプのような場所で何十年も過ごす人や、そこで亡くなられる方さえもいます。ちゃんとした設備や正規の社会体制がつくられていない場所で一生を終えるという生活は、今の日本では想像がつきません。

二つ目は難民の教育についてです。他国で暮すことになった場合、生計を立て、自力で暮すためにその国の言葉や文化を知ることが不可欠です。しかし、難民は自国に戻ることが大前提であることや、人々が受け継いできたものを絶やさないために、母国語を学ぶことも必要です。ＵＮＨＣＲ（国連高等弁務官事務所）ではこうした様々な環境下でのバランスを取りながら、子どもたちに最低でも初等教育を受けられるように支援しています。


講演に耳を傾ける生徒たち

三つ目は日本の難民受け入れについてです。上記のとおり、自国に帰ることを目標にしている難民にとっては自国により近い場所に移り住むというケースが多く、全世界を見ても難民発生地域に近いギリシャやイタリアに受入れが集中しているのが現状です。日本でもベトナム戦争時には受け入れが行われましたが、全体の総数としては極めて少なく、今後の受け入れに対しての規制緩和が課題になっています。

現在、日本ではＴＰＰやＰＫＯ問題などで世界とのつながり方が再度問われ、どのように国際貢献をしていくかが大きな問題となっています。もちろんＰＫＯのような国際貢献についても議論が必要ですが、難民の命を守り、生活を保障するという視点での貢献の仕方も存在するのではないでしょうか。私たちには国の方針を一瞬で変える力はありませんが、難民というものに対しての関心が低いこの国で、まずできることは一人ひとりが知ること、そして、日本にも十分に関わりのある問題であると認識するところからではないでしょうか。



アレクサンダー・アレイニコフ国連難民副高等弁務官